

石原 潤 著

『中国の市(いち)－発達史・地域差・実態』

ナカニシヤ出版 2019年11月 460頁 5,500円  
+税

定期市研究の集大成ともいえる書物が、石原潤氏により1987年に『定期市の研究－機能と構造』という書名で名古屋大学出版会から出版された。そこでは定期市研究の意義が世界的視野で記されており、定期市の調査対象地としてインドを中心にバングラデシュ、中国、日本があげられ、詳細な実態調査結果が報告されている。

この集大成研究が、定期市研究の終わりではなく、始まりの第1歩であったのを知ったのが、その後の中国での精力的な調査研究であり、中国各地での調査報告書：『内陸中国の変貌』2003、『変わり行く 四川』2010、『西北中国はいま』2011(ナカニシヤ出版)が続々と出版され、石原氏のあくなき探求心に感心しつづけてきた。これらの研究書には文部科学省科研費のメンバーの都市、農村、農業、工業、少数民族、観光に詳しい専門家の業績が含まれており、1978年の「改革開放」後の地域変貌の実態が論述されている。

石原氏はその中で、商業、定期市について稿を寄せられているが、今回新たに出版された標題の大著は、氏の原稿を採録加筆し、中国の「市」に焦点をあてて、まとめ上げられたものである。

Ⅲ部12章からなる本書のタイトルを示せば次の通りである。

## 序論

### 第Ⅰ部 市の展開過程

第1章 歴史時代における市の発達

第2章 革命以後の市の展開

### 第Ⅱ部 市の分布と存立状態

第3章 市の地域差概観

第4章 河北省における市の存立状態

第5章 中国北半各省における市の存立状態

第6章 中国南半各省における市の存立状態

### 第Ⅲ部 現地調査から見た市の実態

第7章 改革開放前期における蘇州地域の集市

第8章 最盛期を迎えた河南省の集市

第9章 世紀転換期における四川省の集市

第10章 曲がり角に立つ西北地方の市と野菜流

通システム

第11章 衰退期に入った定期市

第12章 発展する野菜卸売市場

結論

広くて歴史のある中国を対象にして、副題にあるその発達史と地域差をいかに語るか、生半可な気持ちではとても包括できない。しかし、第Ⅰ部と第Ⅱ部でその努力が見事に整理されている。

「市」は都市を意味する「し」ではなく、市場の「いち」であることは書名に「いち」とふりがなが付けてあるからわかるが、さまざまな「市」用語があり、混乱するといけないということで、序論で「定期市」「大市」「市システム」など12の市項目の定義が記されている。

ただ、このなかで章のタイトルにもなっている「集市」が出ていない。いきなり気になったが、末尾に「中国特有の用語については本文中で」と但し書きがあり、そして「革命以後の行政用語として、定期市及び毎日市からなる伝統的市は、『集市』と呼ばれる」(54頁)とあり納得した。この「集市」に限らず、日本ではなじみのない、市言葉を探すのも本書を理解し楽しむことになろう。たとえば「棄市(公開処刑の市)」、「草市(都市の市に入れない商人が形成した農村の市)」、「屯集(山東省領内の市)」など。

第Ⅰ部を読み始めると、西周時代(BC1050～770年)にすでに市が現れていたことに驚き、それが栄枯盛衰をくり返し現在まで続いてきたことに目を見張る。

春秋・戦国期から秦代を経て発達した市は、漢代(BC202～AD220年)に入ると政権の抑商政策により、衰退していった。三国・晋・南北朝と隋・唐の時代(AD220～907年)に入っても軍事化が進み商業統制政策も進められたが故に「市」には厳しい時代であったが、そんな中で幹線道路沿いに「会市」が設けられたり、「苑市」や「草市」など多彩な市がしぶとく立ち上がっていた点、さらに階層的な市の配置システムが成立しつつあった点は注目される。唐の滅亡に続く五代(907～960年)の混乱期には市情報は乏しいが宋王朝時代(960～1279年)には「鎮」と呼ばれる商業機能を主体とした都市が抬頭したこともあり、廟市(fair)の出現も顕著で遠距離交易も盛んになっ

た。元代(1271~1368年)と明代(1368~1644年)の初期は激しい戦乱故に経済は自然経済に近いほどの後退があったが、明代中期以降農業開発、手工業の発展、租税の銭納化などによる貨幣経済の進展によって鎮市(商業機能を持つ小都市)の発展や定期市の開設が再び盛んとなった。清代(1644~1912年)では時代を通じて中国各地で市数の増加・市密度の上昇が共通して認められた。民国時代(1912~49年)を通じて、定期市は活発に活動を続け、東北地方のような新開地を除いて中国本部において主要な流通システムとして存続した。

以上の第Ⅰ部第1章に続いて第2章では「革命以後の市の展開」が語られている。その目的は著者石原氏の言葉によれば「前章で見たように民国期に最盛期を迎えた市が、社会主義革命以後の計画経済期の中国においてどのような扱いを受け、また改革開放以後においてどのような変容を遂げたか」を明らかにすることである。

石原氏は革命後の中国政府の集市に関する政策の変化を追い、左寄りの政策が採られた時期が3回あり、これに対して右寄りの政策への振れが見られる時期が3回ある、と考察している。

1回目の振れ：1949年の人民共和政権樹立直後：集市交易の原則自由の方針。集市はしばらくの間盛況。1953年以降社会主義化が図られ、54年には私営商業のシェアが減少し、集市は活動を弱め、衰退を余儀なくされる。しかし、その結果農副産物の生産・流通の減退が起り、政府は1956年以降、集市の復活を図った。

2回目の振れ：しかし、翌57年に物価騰貴や不正行為が生じ、市の弊害が目立つとされて、再び市場管理が強化され、毛沢東主導の大躍進期の1958年夏からの人民公社化の際にほとんどの集市が閉鎖された。しかしこれらの結果、農副産物の生産は減退し、政府は翌59年に集市の復活を図らざるをえなかった。その後1966年に文化大革命が始まると紅衛兵は自留地・自由市場(集市)を批判し、その廃止を主張したが、政府は廃止しなかったので市は細々と存続した。

3回目の振れ：文革期の左寄りの政策が改革開放期(1978年~)に右寄りに触れた。農村・都市の両方において集市は「集贸市场」「農副産物市場」「自由市場」等の名称で回復し、その発展が

奨励された。2000年ころからは、集市の運営と管理の両面に関わってきた工商行政管理局に対して、運営の面から手を引かせる施策が取られ、集市への投資やその運営の自由化が進んだ。

このように、集市は時の政権の方針から目まぐるしく変遷しつつ生き延びてきたことがわかる。

第Ⅱ部の初めの第3章では、中国の集市の全国スケールでの地域差を、1級行政区(省・自治区・直轄市)別に集市が最盛期となった1994年の統計数値(人口密度、都市人口率、並びに1人当たり所得)から明らかにされている。

こうしたマクロな地域差を示した後、省単位内の分析に移り、第4章では首都北京を含み明・清・民国時代を通じて市が活発に機能してきた河北省を採り上げ、集市数および集市売上高の都市・農村比、集市の売上高などが中国の平均的値であったことを示した。

平均的な河北省と比べて他地域ではいかなる違いを見せるのかを検討するため、第5章で北半の華北、東北、西北地方の各省、第6章で南半の華中、華南、西南地方の各省を採り上げ、市の発展過程、分布、開催頻度が詳しく検討されている。

第Ⅱ部では統計書及び地方志で中国全土の地域差を俯瞰したが、その中で地域差が代表的な地域を選んで実態調査した結果の報告が第Ⅲ部である。

第7章の「改革開放前期における蘇州地域の集市」では、『全国主要集市名冊』を参考にしながら、現地調査により集市の分布を図示し、6カ所の集市に関して、業種別に全商人の配置場所が描かれている。その多くは露天商で同業種の売り手が道路沿いに一列に並んで店を出していた。売り手は、性別では男がやや多く、年齢別では壮年層が最も多く、自家製の農副産物を売る農民が圧倒的で、徒歩または自転車で、2時間以内、20km以内から、ほとんど毎日出市するものが多かった。

第8章の「最盛期を迎えた河南省の集市」では都市部と農村部の2カ所で調査が行われ、前者では毎日市が一般的で、後者ではほとんどが定期市であり、購買額の最も大きい商品は大都市地域では生鮮食料品であるが、農村地域では衣料品であるという違いが示された。また、市密度が高い大都市地域では購買者の多くが複数の市場を利用しているのに対し、農村地域では購買者の多くは単

一の市場を訪問するだけであった。

ところで、筆者石原氏が意欲的に力を込めて書かれているのが第9章「世紀転換期における四川省の集市」である。その第1節「大都市成都市の郊外の集市」の副題に「スキナー調査地域再訪」とあり、アメリカの人類学者G.W.Skinnerに挑戦している。

全世界の大学で地域論を論ずる授業で必ず紹介されるのがスキナーの市場配置モデル、いいかえれば中心地論を導く市システム論である。その舞台となったのが民国時代の四川省である。

石原氏は1999～2001年にこの地に入り、スキナー論が正しかったのかどうかの検証を果敢にも行ったのである。その結果が、317頁で簡潔に記されているので載せておこう。①Skinnerは、解放直前の成都市東南郊外の市場(町)や市場圏について、おおむね正確な認識に基づいて $k=3$ モデル(注：供給原理に基づくモデル)を導出したと考えられる。ただし、一部の集市の市日を記載しなかったことには疑問が残る、市場圏社会の完結性については疑問の余地があるように思われる。②Skinnerの調査後約半世紀を経た今日、その調査地域におけるかつての集市は全て復活しており、一般に市日頻度を高めているが、集市の繁栄の程度には格差があり、立地集落の中心集落としての階層に変動が認められる。

1949年に中国に社会主義政権が成立して以降中国でフィールド調査できなかつたスキナー氏(1925～2008)にとって、今回の石原氏の書物の出版は誰よりもうれしかったであろう。

さて、中国東部に比べ市研究が遅れていた西北部の市の分布と展開過程はいかなるものであったか、その実態を2005～07年に調査し、その成果を述べたのが、第10章「曲がり角に立つ西北地方の市と野菜流通システム」である。ここでも他地域での調査と同様に都市と農村部での違い、大規模(卸売り)・小規模(小売り)の市の違いを念頭に置き、野菜流通システムに焦点を当てて考察されている。

都市としては、西北地方最大の都市西安、地方都市銀川市、辺境のオアシスにある酒泉市で、高速道路の建設による野菜流通の急速な広域化が認められた。卸売市場の拡大と階層分化が認められ、小売り段階では都市から小都市に至るまで

スーパーマーケットの急速な普及が確認された。ただ、伝統的小売市場(集市)の全般的な優位性を突き崩すまでには至っていないとの過渡期の状況が示されている。

第11章「衰退期に入った定期市」では、前章とほぼ同時期(1997～2009)の集市の動向を河南省登封市域、成都市を例に採って検討されている。ここでも、集市出店者の急減がみられるが、都市化が集市にとって正の効果を生み出す場合、すなわち人口増で市場が新設される場合や、売上の上昇効果も見られたという。

最終章の第12章「発展する野菜卸売市場」では、第1節で鄭州市、第2節で西安市をとりあげ、両都市ともに大型の卸売市場が次々と開設され、卸売市場間の熾烈な競争が生じた事例が述べられている。

そして、「結論」に入るが、結論が分かりやすいのは、本書の副題に付けられた「発達史」「地域差」「実態」について考察すると序論で公言されたことが、果たして本書でどの程度達成されたかを、その3グループごとに設定された5つ、計15の課題ごとに整理・要約されている点である。

Iの課題①は「中国では市(いち)や市(いち)システムはいつごろからどのようなかたちで始まったか」で、それは「市は西周時代に起源するとされ、……市システムが広範に成立したのは『草市』が誕生する唐末・宗代以降であろう」とまとめられている。

以下、全課題を記すのは割愛するが、地域差を「市」の呼び名で差があることを示したIIの課題①と、今後の課題としたいと述べられたIIの課題⑤を、一部簡略化しているが、石原氏の言葉で紹介することにしたい。

IIの課題①市の呼称について：華北・東北・西北地方の大部分及び中部地方の一部では「集」、華中地方の長江流域では「市」、華南地方では「墟」、四川省や貴州省では「場」、雲南省では「街」、新疆自治区のウイグル族地域では「バザール」と呼ばれることが多かった。これらは主として定期市に対する呼称であり、大都市に対しては全国的に「廟会」・「山会」と呼称することが多いが、モンゴル族地域の「ナダム」、チベット族地域「扎崇」などの特別の呼称法もある。

課題⑤市の社会的機能について：既存の研究や

実態調査により、まず、市の社会的機能については、Skinnerが四川省のフィールドワークから、特に茶館での交流の意義について強調したのに対し、華北地方の現地調査をした日本人研究者などからは、市は経済的取引の場に過ぎないとの批判が出されている。また Skinnerが四川省では社会圏と市場圏とが重なり、市場共同体が存在するとのに対し、華北地方を調査した日本人研究者などからは、例えば通婚圏や祭祀圏、宗族の単位や風俗・習慣のエリアなどは市場圏と一致しないとして、否定的な見解が出されている。両者の主張の違いは、地域差として捉えるべきかどうかは今後の課題であろう。なお複数の民族が共存する地域では、市が民族間の交流の場として機能していることにも留意すべきであろう。

定期市調査のイロハを石原先生に教えていただき、南アジアと日本で定期市調査を続けている評者が今後の市研究の柱としたいと思っているのが「市の社会的機能」である。

通婚圏や祭祀圏と市場圏は一致しないということは理解できるにせよ「市は経済的取引の場に過ぎない」ということはありえない。まずは経済的取引以外の市の機能を、本書を再読して拾い上げるとともに評者の市調査体験を記すことによって本書評を締め括りたい。

いきなり衝撃的であったのが、紀元前の春秋・戦国時代、秦代・漢代、そして1000年たった唐代(618~907年)においても、市は罪人を公開処罰する「棄市」の場であった、ということである。さすがにその後の時代では見られなくなったが、古今東西共通してみられる祝祭・演劇の場とは真逆の負の祭典の場でもあったことは、歴史資料が豊富な中国ならではのこともかもしれないが、記憶にとどめておきたい。

定期市内での争いのみならず、地域で紛争が起きた場合も、有力者が集まり市日の茶館で法廷が開かれる。この市場での法廷は民国時代までの事例で現在については不明であるが、バングラデシュでは定期市周辺の村々でのトラブル、たとえば耕作地の所有権問題とか離婚問題について解決策が当事者を尋問する形でおこなわれていた。

市に集まる人の交流について、石原氏は異民族間の交流に留意しているが、カースト制度の国のインドで、評者は北インドのある市でバラモンが最下層の不可触民から野菜を購入する現場に遭遇したし、またある市で野菜売りに聞き取りをおこなった際に隣土の売り手がバラモンと不可触民であった。日常生活では結婚にせよ食事にせよ避けているのに、市場という空間に入ると、カーストの壁はなくなるのかと感心した。

イスラム教徒の国バングラデシュではモスクの前に市が立つ。地方の中心都市であるミルザプールでは市の露店商人にヒンドゥー教徒がかなりいて、彼らもモスクの前で店を出していた。また中心街に祀られているヒンドゥー教のカーリー女神の前の通りにはイスラム教徒の露天商も高いをしていた。市という空間では、宗教の壁もなくなるのかと感心した。

本書評で、紙面の関係で、紹介できず残念であったのが、数多く載せられていた個別の市の見取り図である。「異国の地で現地語が話せなくても、市場に入り売手の位置を業種別に●：野菜、○：果物というように印を付ければ立派な市マップが描けますよ。そして『これは何?』という現地語を一言覚えて商品を指させば、売手と会話ができ、良い資料が得られますよ」との勇気づけを先生からいただいた。そのような市調査の初心を思い出させてくれた書物でもあった。

(溝口常俊)